

メジャーリーグベースボールにおいて人種差別が解消していった経緯について
—ジャッキー・ロビンソンに着目して—

畠田 圭司 (生涯スポーツコース 地域スポーツコース)
指導教員 菅井 京子

キーワード：メジャーリーグベースボール，人種差別，ジャッキー・ロビンソン

序論

本研究では、メジャーリーグベースボールでの人種差別の歴史を調べ、ジャッキー・ロビンソンに着目して、どのようにしてメジャーリーグベースボールにおいて人種差別が解消されていったかの経緯を明らかにする。用いる主な資料は波部優子の『背番号 42 メジャー・リーグの遺産』、近藤隆夫の『ジャッキー・ロビンソン』である。

I. アメリカ社会における人種差別

黒人たちは黒人奴隷制度という制度のもと、1619年から約250年もの間、労働力として無理やり働かされた。1860年代に奴隷制度は廃止されたが、黒人奴隷の地位はなかなか上がることはなかった。黒人たちにとって奴隷制度廃止は大きな出来事であったが、それ以後、現在までの約150年間、アメリカ社会における人種差別は実際にはなくなっていない。

II. ジャッキー・ロビンソンと彼が受けた人種差別

ジャッキー・ロビンソンは1919年に誕生し、幼少時から常に差別を受け続け、一時は非行にまで走り、いわば不良少年になってしまった時もあった。差別がきっかけで大学を中退し、軍隊を除隊した。その後、ニグロリーグ入団という大きな転機があった。当時、黒人は白人と隔離され、実力があってもメジャーリーグベースボールの同じ晴れ舞台に立つことができなかった。この晴れ舞台において力をぶつけ合うことはできないという最大の差別を受けていたが、1940年代にジャッキー・ロビンソンがメジャーリーグベースボールデビューし、その流れを変える。しかし、メジャーリーグベースボールにおいてもあまりにも酷い差別を受ける。

ジャッキー・ロビンソンは時に反発しそうになるが、差別に耐え続けながら結果を残し、チームの勝利に貢献していく。そんな紳士的な彼の姿を見ていくうちに、少しずつではあるがチームメイトたちの心も動き始め、彼を助けるように団結するようになっていく。同じチームで、

同じユニフォームを着て、同じ目標を持ちプレーをするうちに、黒人も同じ人間であると知り、人種差別の高い壁を壊していくことができた。

1940年代、ジャッキー・ロビンソンの登場は牧師による公民権運動の盛り上がりとし、1960年代に勝ち取った公民権法制定への大きな布石であった。メジャーリーグベースボールにおいて人種差別を解消していった経緯、それはアメリカという国のこれからの歴史を変える手がかりになるものであろう。

結論

ジャッキー・ロビンソンは、両親の離婚、貧困、人種差別に挫けることなく、活躍し続けてきた。黒人初のメジャーリーガーになり、黒人に対する偏見の軽減、白人と黒人の共働の可能性、アメリカ社会における人種関係の将来像をアメリカ国民に提示したことがわかった。ジャッキー・ロビンソンを中心に、野球の起源や彼の生前に起きていた出来事を見てきたが、彼がいなければ現在活躍している黒人の姿はなく、ベースボールは白人がするスポーツになっていた。

引用・参考文献

- ・ブライアン・ヘルゲランド(2013年), 映画, 42 世界を変えた男
- ・波部優子(2009), 背番号42 メジャー・リーグの遺産, 文芸社, 12 - 18 頁
- ・本田創造(1991年), アメリカ黒人の歴史 新版, 岩波書店, 36 頁
- ・近藤隆夫(2013), ジャッキー・ロビンソン, 汐文社, 141 - 142 頁
- ・パップ・ンディアイ(2010年), アメリカ黒人の歴史—自由と平和への長い道のり, 創元社, 1 - 4 頁
- ・豊浦 彰太郎(2012年), 知られざる「ニグロリーグ物語」
<http://www.jsports.co.jp/press/article/N2012071710533701.html> 2015/12/23 閲覧